

資料 3

第18回日本水大賞・2016日本S JWP 各賞 選定理由

大 賞 (副賞 200 万円) 福岡県 団体

活動主体の名称：特定非営利活動法人筑後川流域連携倶楽部

活動の名称：恵みに感謝し緩やかな連携で豊かな流域を
筑後川流域連携推進事業

○受賞理由

筑後川は、大分、熊本、福岡、佐賀の4県に跨る九州一の大河です。流域には環境や地域づくりに係わる数多くの個人や団体があり、それぞれの地域で活発な活動を行っていましたが相互の交流はほとんどありませんでした。そこで、県境や市町村を飛び越えて流域の視点から連携した活動を行うため、今年で30回を迎える「筑後川フェスティバル」の開催や100号を超えた1万5千部の「筑後川新聞」の発行などを行ってきました。また、流域を「遊び」「学び」「仕事」が一体化した創造的活動の場とする「筑後川まるごとリバーパーク」では、流域にある観光スポットや自然環境、歴史、文化、特産物などを体験するリバーツーリズムを企画するなど、市民レベルでの交流・連携から地域活性化を目指す活動へと発展してきています。さらに、他流域との交流・連携まで拡大してきています。

流域は山川海へとつながる水循環の場であるとともに、経済・文化の交流の場でもありましたが、近年はその結びつきが薄れてきています。本活動は流域の自然的・歴史的な結びつきを取り戻す、市民による流域連携の模範となるものであり、高く評価できるものであることから、大賞に相応しいと判断しました。

国土交通大臣賞 (副賞 50 万円) 山形県 団体

活動主体の名称：特定非営利活動法人パートナーシップオフィス

活動の名称：美しい山形の海を取り戻すための地域連携活動

○受賞理由

従来、川や海岸に漂着するごみの問題は地先の愛護団体による清掃活動だけで対応してきました。しかしながら、漂着ごみは河川を經由し海域を越えて漂流することから地先だけの努力で解決できる問題ではありません。この漂着ごみの実態を把握するために評価手法を開発しましたが、この手法が全国調査に採用され、さらには同じ問題を抱える韓国でも採用されるなど、漂着ごみの実態解明に大いに役立っています。さらに、山形県では実態把握にとどまらず対策施策の評価にも用いられ、効率的な漂着ごみ削減対策が行われて効果を挙げています。

調査型のクリーンアップ活動を確立し、地元山形だけでなく、新潟や山口、さらには韓国の活動にも影響を与え始めたことは、高く評価できるものであることから、国土交通大臣賞に相応しいと判断しました。

環境大臣賞（副賞 50 万円） 静岡県 団体

活動主体の名称：特定非営利活動法人グラウンドワーク三島

活動の名称：地域協働で水の都・三島の水と緑のネットワークを創造

○受賞理由

「水の都・三島」の中心市街地を流れる源兵衛川は、昭和 30 年代半ばには、湧水の減少とゴミの不法投棄によって生活雑排水が流れるドブ川となってしまいました。これに対して 23 年間にわたり市民・NPO・行政・企業との地域協働による環境改善活動に取り組んできた結果、現在では豊かな水辺空間が回復して市民の憩いの場になっているとともに、観光スポットとして年間 620 万人もの観光客が訪れることで空き店舗が解消するといった効果も生まれました。この活動は、松毛川の河畔林を維持するためのトラスト運動や植林活動、境川大湧水公園構想に取り組むなど、一層拡大してきました。

20 年以上のグラウンドワーク活動によって、「水の都・三島」の水辺と生態系の再生に大きな実績を上げており、地域協働による水と緑のネットワークづくりの模範として高く評価できるものであることから、環境大臣賞に相応しいと判断しました。

厚生労働大臣賞（副賞 50 万円） 千葉県 団体

活動主体の名称：NPO 法人水道千葉

活動の名称：水道 OB よ！ 立ち上がれ!!

○受賞理由

千葉県には中小規模の水道事業体や用水供給事業体が多く、施設も老朽化が進んでいます。その多くは財政悪化により施設の更新が困難となっている中、技術職員も減少しており、震災時などの非常時における安定給水に対する不安が増大しています。この状況に対応するため、水道事業体等の退職者が結集して県民と水道事業体等に対する支援活動を行っています。活動は、水道事業体等に対する非常時における支援にとどまらず、水道技術を継承するための講師やアドバイザー派遣、水源水質調査の支援、さらには高齢者宅の水まわり点検など水道利用者の支援も行っています。

退職した水道技術者が長年培った知識と経験、技量を、社会、地域の安全確保に貢献し、水道システムの維持とともに貴重な技術の世代間伝承を行っていることは、高く評価できるものであることから、厚生労働大臣賞に相応しいと判断しました。

農林水産大臣賞（副賞 50 万円） 東京都 学校

活動主体の名称：東京農業大学

活動の名称：多摩川源流大学による源流域の自然保全活動及び教育活動

○受賞理由

「地域の守り手を地域とともに育成する」という観点から、源流域において地元住民などとともに、机上では学べない本物を体験することで、農山村地域の暮らしを理解し、地域に愛着を持つ人材の育成を行っています。地元住民を講師として、人工林の間伐作業などの林業体験、農作物の栽培・収穫・販売までの一連の体験、さらには商品開発までも行う実践的な活動を始めてから 10 年近く経ちましたが、参加した学生によって「源流放課後の会」が設立されるなど、地域の行事に積極的に参加する人材が増えてきています。また、学生に限らず一般向けの講座を開催するなど下流域の市民と源流域とを結びつける活動も行っています。

卒業生たちが「源流放課後の会」を設立するなど、活動に広がりや重なりが出てきており、過疎化が進む全国の農山村における人材育成のモデルプランとして、高く評価できるものであることから、農林水産大臣賞に相応しいと判断しました。

文部科学大臣賞（副賞 50 万円） 福島県 学校

活動主体の名称：福島成蹊高等学校 自然科学部

活動の名称：福島原発事故後の茶屋沼の環境と微小生物

～微小生物による汚染水から放射性物質の除去の可能性～

○受賞理由

福島原発事故後、身近な環境の変化を調査したいという生徒の要望から、線量が比較的高かった茶屋沼の微小生物の調査を開始しました。毎月、種類と個体数の観察と採取した微小生物に異常がないかを調査する中で、ミカズキ藻が細胞中にストロンチウムを吸収していることが判明しました。この特性が現在問題となっている汚染水中の放射性ストロンチウムの除去に利用できないか、より効率のよい吸収・吸着条件を求めて研究しています。茶屋沼では除染が行われたことで放射線量が大きく低下しましたが、依然としてやや高い状態が続いており、問題を風化させないため、また地域住民に安心を与えるためにも調査を継続しています。

高校生が始めた環境調査が、放射性物質の除去の研究まで発展しました。原発事故による放射能汚染という困難な問題に対し、何か自分たちの力で出来るものやっという姿勢は、高く評価できるものであることから、文部科学大臣賞に相応しいと判断しました。

経済産業大臣賞（副賞 50 万円） 東京都 企業

活動主体の名称：株式会社 トヨタマーケティングジャパン

活動の名称 : AQUA SOCIAL FES!!

○受賞理由

トヨタのハイブリッドカー「AQUA」の車名にちなんだ「水」をテーマに展開するプロモーション活動として、全国 47 都道府県で年間 100 回以上、地元の新聞社と環境活動を行う団体とともにイベントを企画し実施しています。地域には熱心に環境活動を行う団体が数多くありますが、人材不足や資金不足など様々な問題を抱えています。このプロモーション活動では、資金面はもとより、地元新聞社の支援を得ることで多くの人に参加していただくことによって、団体の認知度が高まるという効果も上がっています。

従来の CSR ではなく、広告費を用いたプロモーション活動として地域の活動団体を支援するという新しい活動支援プログラムを考案し、実際に全国で展開していることは、高く評価できるものであることから、経済産業大臣賞に相応しいと判断しました。

市民活動賞（副賞 30 万円） 千葉県 団体

活動主体の名称：特定非営利活動法人せっけんの街

活動の名称 : 地域の中で一人一人が参加する環境保全型街づくり

○受賞理由

「日本一汚い手賀沼を守ろう！」と生協・漁協・環境団体などが声を上げましたが、手賀沼の主な汚染源が家庭雑排水とわかり、加害者でもある自らの生活スタイルを見直して少しでも水環境を改善しようとの活動は始まりました。2 万人もの市民からの出資によって建設された 2 つの工場で、廃食油から製造されたリサイクルせっけんはこの 30 年間で通算 3000 トンを超えました。また、水循環を回復するために雨水タンクの普及活動を始めるなど、住民一人一人が参加する環境保全活動を続けています。

市民自らが廃食油からせっけんをつくり、湖沼の水環境を取り戻す活動を長年にわたり行い、事業として成功させながら、環境問題への関心の機会を常に提供し続けてきたことは高く評価できるものであることから、市民活動賞に相応しいと判断しました。

国際貢献賞（副賞 30 万円） 東京都 企業

活動主体の名称：清水建設株式会社

活動の名称：中東オマーンにおける石油随伴水からの新規水資源の創出
～石油随伴水で砂漠を緑に～

○受賞理由

石油随伴水は原油とともに生産される地下水で、原油量の数倍にも及ぶ廃棄物です。これを処理して水資源として利用することができれば、廃棄物を減少するだけでなく新たな産業を興すことができますが、量が膨大であり一般的な工場排水の処理技術は適用できないため、簡易で汎用性と効率性が高い新しい処理システムが必要となります。そこで、オマーンの特産品であるナツメヤシの廃材から既存の約 2 倍の性能を持つ活性炭を開発するなどの工夫により、経済的に実現可能な処理システムを開発しました。

これまで廃棄物としてコストをかけて処分されてきた石油随伴水を、新たな水資源として活用するという発想の転換と現地の状況に即した技術開発は大いに評価でき、波及効果も大きく、国際技術支援として高く評価できるものであることから、国際貢献賞に相応しいと判断しました。

未来開拓賞（副賞 10 万円） 青森県 学校

活動主体の名称：青森県立木造高等学校深浦校舎・青森県深浦町・
白神の生き物を観察する会

活動の名称：世界自然遺産「白神山地」の麓で展開する防災・環境保全・環境振興
に繋がる活動

○受賞理由

世界遺産「白神山地」から河川に流出した倒木の多くは放置されたままで、洪水時に護岸や橋脚などを破壊し、海に流れて漁船や漁網に被害をもたらす厄介者でした。この流倒木を地元の高校生が「マタギ」の知恵を借りながら回収して木材チップに加工し、市民や役場の職員、中学生、観光ガイドなどとも協力して観光地まで運び上げて遊歩道などに敷設しました。チップを敷設した遊歩道は「歩きやすい」などと観光客に好評で、地域の観光にも役立っています。

環境保全と防災、観光の連携に役立つ具体的な活動であり、高校生を中心に市民や行政、企業、小中学校生までが手を取り合って世界遺産を守ろうとの気概が感じられることから、今後の継続を期待して、未来開拓賞に相応しいと判断しました。

未来開拓賞（副賞 10 万円） 愛知県 学校

活動主体の名称：名古屋市立名古屋商業高等学校

活動の名称：葦から“Zoo”

○受賞理由

日本の原風景である葦原は、近年、身近な景色から消えつつあります。葦原の保全を行うためには、葦と水質の浄化や生物多様性の維持との関わりを広く理解してもらうことが必要ですが、単に声高に叫ぶのではなく、葦の有効利用によるビジネス活動と連動させることを思い立ちました。葦から紙へ、紙から糸へ、糸から布へ、布から製品へと企業などの協力を得て三角巾などの商品を開発し、見本市などで発表して多くの人の関心を集めました。また、葦からつくられた布を利用した工作教室や葦が水質浄化と生物多様性に貢献している姿を訴えるアニメ製作などを通じ、環境意識の啓発にも取り組んでいます。

エコロジカルな活動をビジネススペースに乗せる工夫をして、その過程での困難を体験しながら克服していくという商業高校ならではの姿勢は高く評価でき、今後の展開を期待して、未来開拓賞に相応しいと判断しました。

未来開拓賞（副賞 10 万円） 東京都 団体

活動主体の名称：特定非営利活動法人国際ボランティア学生協会

活動の名称：大学生の熱意と行動力で外来水生植物から琵琶湖を守る

○受賞理由

日本最大の湖である琵琶湖では、近年、外来水生植物の異常繁殖が大きな問題となっています。中でも「オオバナミズキンバイ」は極めて繁殖力が強く、ちぎれた茎からも根を生やして一日に3cmも成長します。平成21年に発見された当時は生育域がわずか142m²でしたが、平成26年には1100倍の約15万7,400m²にまで拡大し、琵琶湖の水質浄化や多くの鳥や魚の産卵場所や棲家をとっているヨシ群落にも侵入してきました。そこで過去23年にわたり国内外で2000近い事業を実施してきたノウハウを活かし、平成25,26年に23回、延べ4,374人が参加して約250トンのオオバナミズキンバイを除去し、平成26年度末には、生育域が約4万6,300m²にまで減少しました。

外来種の除去という地味な活動を、大勢の学生を組織して取り組み大きな効果を挙げてきており、今後の継続・展開を期待して、未来開拓賞に相応しいと判断しました。

審査部会特別賞（副賞 10 万円） 愛知県 行政

活動主体の名称：木曾三川流域自治体連携会議

活動の名称：流域全体で木曾三川の水環境を守る～地域経済の自立へ～

○受賞理由

木曾三川流域は、古くから木曾川、長良川、揖斐川の豊かで綺麗な水の恩恵を受けてきました。これまでも水環境保全への理解を深めるため、下流域の住民が中上流域で山の手入れなどを行う水源地保全活動等を実施してきました。しかしながら、上中流域は過疎化や農林業の衰退などの深刻な問題を抱えており、流域の水環境を将来にわたって守るためには、上流域の地域経済の自立が不可欠であるという意見から、平成 23 年度から新たに「人・物の交流」事業を創設して実施してきています。物の交流としては、中上流域の生産者と下流域の仕入れ企業との商談会を毎年開催しています。また、人の交流としては、観光振興を図るため旅行企画選考会を開催し、入賞企画の一部を実施しました。

従来の水源地保全という考えを一步進め、水源地域の経済的自立を流域の 3 県 40 市町村が連携して支援する画期的な取り組みであり、高く評価できるものであることから、審査部会特別賞に相応しいと判断しました。

審査部会特別賞（副賞 10 万円） 神奈川県 団体

活動主体の名称：なでしこ防災ネット

活動の名称：災害時の水の確保と「災害時協力井戸の家」看板設置運動を地域とともに

○受賞理由

大震災などの災害時に水道供給が絶たれると市民生活に大きな影響が予想されます。一方、秦野市は良質な湧水に恵まれていることから、災害時にはこの湧水を利用しようと、市と協働して市民や中学生、高校生が中心となり災害時にも使用可能な井戸や湧水を調査しました。その内、所有者の理解が得られた井戸を登録してマップに示すとともに 119 箇所に「災害時協力井戸の家」の看板を設置しました。この活動には多くの中高生が参加しており、防災教育だけではなく地域の水環境の理解を深めるよい機会になりました。また、登録された井戸が少ない幾つかの自治会で真剣に災害時の「水」問題の議論を始めるきっかけになりました。

水のない生活の大変さに着目したことは、女性ならではの視点であり、実際に役に立つ成果が得られているとともに環境教育、防災教育にも効果が見られることは高く評価できるものであることから、審査部会特別賞に相応しいと判断しました。

審査部会特別賞（副賞 10 万円） 熊本県 団体

活動主体の名称：次世代のためにがんばる会

活動の名称：水環境活動の年間通じた継続活動

○受賞理由

子供たちへの環境問題の啓発活動を、机上論ではなく、異なる世代と協働でさまざまな活動を行うことにより、次世代を担う人材を育成することを目指して、年間通じた水環境活動を継続して実施してきています。その活動は平成 13 年に始まりましたが、年を追うごとにイベントが増えて現在では、牡蠣殻によるダム湖の水質浄化、ダム湖周辺での環境教育学習、ホタルの育成、河川や海岸のゴミの調査と清掃活動、身近な河川の水質調査、川の体験発表会、女性が手がける川のフォーラムなど多岐にわたっており、数多くの参加者を得ています。

環境保全活動を担う後継者の育成が大きな課題となっている中、次世代につながる多彩な水環境教育を長期間に亘り発展させながら継続して行っていることは高く評価できるものであることから、審査部会特別賞に相応しいと判断しました。

2016 日本ストックホルム青少年水大賞（S JWP へ日本代表として派遣・副賞 20 万円）
(2016 日本 S JWP)

学校・クラブ名：山口県立山口高等学校 化学・生物部

研究活動の名称：複合的水質監視装置の開発とナミウズムシの生態

○受賞理由

人間生活を豊かなものにするため医薬品、食品添加物、農薬、洗剤、金属製品など様々な化学物質が使用・廃棄されていて、その種類は年々増加の一途を辿っています。こうした多種多様な化学物質は使用・廃棄後に水域に流れ込み、様々な悪影響を及ぼしている可能性があります。最新の分析機器を用いることで、これらの化学物質の存在濃度を一つ一つ正確に分析することはできる一方で、水中には未知の物質も含め多種多様な物質が存在していて、実際の野生生物への複合的な影響を評価することはできません。そのため、本校が取り組んでいるような、水生生物を用いた水質監視は、世界的に広く注目されていて、北米や欧州、韓国でも排水規制に導入されているほか、我が国でも環境省が排水の評価と管理の手法として導入を検討中です。植物のオオカナダモと甲殻類のオオミジンコに加え、日本の在来種であるナミウズムシ（プラナリアの一種）の 3 種の生物を用いて、独自の水の常時監視と安全性評価をおこなうシステムの構築に成功しています。このシステムの特徴として、動物愛護の観点から、欧州などで使用が制限されている脊椎動物（魚など）を使わないこと、3 種の生物への致命的な影響ではなく、植物の細胞質流動、ミジンコの遊泳、ウズムシの切断後の再生と行動などを評価・観察項目にしていることは、興味深いものがあります。

このような研究成果をさらに発展させることにより、国内外の排水や河川水等の常時監視や安全性評価、有害な化学物質の効率的な評価や管理を行うシステムが飛躍的に向上することが期待されることから、日本ストックホルム青少年水大賞を授与することとしました。

2016 日本S JWP 審査部会特別賞 (副賞 10 万円)

学校・クラブ名 : 大阪府立園芸高等学校 バイオ研究部

研究活動の名称 : 海洋汚染源アオサのカビ酵素による糖化とその糖化液を資化できる酵母の探索

○受賞理由

主に夏に異常繁殖して、貧酸素、腐敗臭、観障害などの被害を起こすアオサなどのアオサ類は、やや富栄養化した海岸での大きな環境問題になっています。このアオサ類を利用して、バイオエタノールを作ろうとする試みは、今まで陸揚げして燃やすしかない処分法に代るもので、その着想は高く評価できます。アオサの糖化効率の良いフザリウム属の出す酵素の発見と同定、アルコール発酵効率のよい酵母F株の分離と目的に沿った微生物の発見は、高校生のレベルを大きく超えた研究成果と評価されます。微量分析のための高速液体クロマトグラフィーや遺伝子解析のためのシーケンサーといった先進的な機器を上手に使いこなすとともに、基礎的な化学分析である分光分析なども着実に実施しているなど、バランスのとれた実験手法も高く評価できます。これからは、アオサの糖化とエタノールの変換効率の向上を図るとともに、異常発生して環境問題になっている他の海藻や水草（カナダモ、アカウキクサなど）についても、同様の技術開発が可能か検討することが期待されます。よって日本ストックホルム青少年水大賞審査部会特別賞を授与することとしました。